

後漢における外戚と政治 ：後漢王朝崩壊への道

序論

・研究の背景

前漢は、外戚王莽の篡奪により滅亡した為、後漢王朝は外戚の台頭を非常に警戒していた。

→しかし、後漢は四代目皇帝和帝（8～105）の代から皇太后・外戚による政治介入が連続する。

・研究の目的

なぜ、外戚政権が連続して成立したのか？

後漢における外戚政権の特色とは何なのか？

結論

・外戚はどのようにして権力を握っていたのか？

一族や外戚派官僚を、皇帝・皇太后の側近を中心に配置する。

外戚一派により首都の軍事権をほぼ独占していた。

外戚領袖も首都にいる時は政治に参加し、強い影響力を持っていた。

・外戚衰亡の要因とは？

外戚よりもさらに皇帝・皇太后に近い宦官の政治的台頭。

当初は宦官との提携により、政権運営を有利にしていたが、次第に立場が逆転していった。

後漢の外戚の特色①

・外戚の領袖はどんな地位にいたのか？

① 将軍・車騎将軍・大將軍など

後漢の中期以降の将軍は、

遠征にはいかず、首都で政治を左右していた。

将軍府は政策立案のための機関であった）

② 録尚書事

皇帝に送られる**上奏文にあらかじめ目を通す**ことができる。

後漢中期の梁冀より、外戚が保持するようになる。

後漢の外戚の特色②

・その他の外戚はどんな地位にいたのか？

<側近官>.....①皇帝・皇太后の近くに侍り、意思決定に関与する。

②詔令の伝達に関わる。

<宮城警固官>.....皇帝・皇太后の住む宮殿や、首都洛陽の警備を行う。

↓

外戚は軍事力を保有しつつ、皇帝・皇太后の意思決定に関与した。

※親外戚派の官僚たちも、こうした官に就任していた。

後漢の皇太后の特色

・後漢は皇帝の早世により、**年少の後継者**が立てられることが多い。

↓

政治は皇太后と外戚の手に委ねられる。

皇太后.....後漢では、ほとんどの場合、新帝と血縁関係を持たない。

前漢と異なり、建国の功臣一族の出身が大半。

（地位が安定）

制度的に**皇帝の政務代行が可能**であった。

後漢前期の外戚政権

・竇氏政権（8～92）

外戚領袖の竇憲（皇太后の兄）は任期中ほとんど遠征に出ていた。

一族の人間が皇太后の近くに控え、意思決定に関与していた。

・鄧氏政権（105～121）

外戚領袖の鄧騭（皇太后の兄）は、約一年遠征に出た他、110年には引退。

しかし、文書伝達や皇太后の側近は鄧騭の引退以後も存在し、

詔勅関連の機関は鄧氏派の官僚が握っていた。

↓

この時期までは、**外戚と皇太后中心で政治を左右**できた。

宦官の政治的台頭

<第六代皇帝安帝の親政（121～125）>

複数の外戚や安帝に批判的な勢力の存在。

<閹太后（125）の執政>

宮廷の士人官僚との関係不和。

新たな側近としての宦官の必要性

<宦官の優位性>

宦官は、外戚の立ち入りが制限される禁中にも宿直が可能。

外戚と宦官の政治的提携が始まり、続く梁冀政権下で顕著になる。

外戚と宦官の提携

・梁冀政権（144～159）

第七代皇帝順帝の死後、皇太后の兄、大將軍梁冀が専権を振るう。

大將軍・録尚書事として首都に常駐しつつ、政策立案をほぼ独占。

<特色>

宦官の利用が顕著。自身に忠実な宦官を宮中に配置）

梁冀誅滅後は、宦官が皇帝・皇太后の側近を独占し、外戚を圧倒。

【参考文献】

東晋次『後漢時代の政治と社会』、名古屋大学出版会、1995年。

渡辺将智『後漢政治制度の研究』、早稲田大学出版部、2014年。

廖伯源『歴史と制度——漢代政治制度試釈——』、台湾商務印書館股份有限公司、1998年。

楊鴻年『漢魏制度叢考』、武漢大学出版社、2005年。

「後漢における外戚と政治：後漢王朝崩壊への道」は、日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受けたものである。

後漢宦官の政治的台頭 ：後漢王朝崩壊への道

序論

●研究の目的

なぜ、梁冀政権崩壊後に宦官が政治的に台頭できたのか？
皇帝の命令文の伝達における宦官の関与を考察する。

●研究の背景

大將軍梁冀の誅殺（159）を含め、後漢王朝は三回にわたり、
時の権臣を誅殺してきた。全て皇帝と宦官による共謀である。
→皇帝による宦官の信頼・依存が高まる。

結論

1、宦官が皇帝の命令文書を偽造できた理由

皇帝の意向を書記官に伝達する際に、偽造していた。
宦官が自ら命令文を偽造する場合、書記官に伝達させていた。
→後漢後半期には、皇帝による命令文の内容点検が軽視の傾向。

2、宦官が外戚に勝利し得た理由

皇帝の命令文書を偽造したことが要因として大きい。宦官が
外戚よりもさらに皇帝と親密な関係を築けたことによるであろう。

後漢の外戚の政治的特徴

皇帝の舅もしくは祖父として、中央・地方軍の
総司令官である**大將軍**として軍事の権限を掌握し、
皇帝に上奏される全ての奏文と皇帝から下達される
全ての命令文を事前に目を通すことができる**録尚書事**として
国政を掌握。

* しかし、その強大な権限がしばしば皇帝に憎まれ、
失脚の運命をたどることもある。

後漢宦官の政治的特質

特別な許可を有する官職以外、入ることのできない
皇帝の私的空間（禁中）に居住して、皇帝の生活の世話をする。
→皇帝と親密になれば、皇帝との意見交換を通して
国政に関与。

* 皇帝の書記官である尚書官ですら、自由に禁中に
出入できない。
→本発表における宦官の台頭に重要な意味を持つ

梁冀以後の宦官と外戚の権力闘争①

大將軍竇武の誅殺（168）

- ①霊帝皇太后の父で大將軍の
竇武が宦官誅滅を決意。
- ②宦官が竇武の狙いに気づき、**皇帝の書記官（尚書）**
を脅して、皇帝の命令を偽造し、軍を動員。
- ③皇帝の命令で動員された軍が竇武と
その仲間を誅殺。

梁冀以後の宦官と外戚の権力闘争②

大將軍何進の誅殺（189）

- ①献帝皇太后の兄で大將軍の何進が
宦官誅滅を決意。
- ②宦官が何進の狙いに気づき、**皇太后の命令を**
偽造して、何進をおびき出し、何進を誅殺。
- ③**皇帝の詔を偽造し、首都の軍事官に**
宦官の一派を任命。

宦官の外戚に対する勝利の要因：矯詔

1、矯詔とは何か？

矯詔とは、皇帝の命令文書を偽造することである。
→竇武の誅殺（168）何進の誅殺（189）においてもいずれも矯詔が
大きな役割を果たしている。

2、竇武の誅殺（168）何進の誅殺（189）の大きな違い

竇武の誅殺時には、宦官は皇帝直属の書記官に命令文書を書かせて
いるが、何進の際には、宦官自身が命令文書を作成している。
→20年間における宦官の文書作成能力の成熟。

後漢皇帝の命令文の作成・伝達過程

	皇帝命令文書作成・伝達順序
①	皇帝の意向を書記官に伝達
②	書記官が皇帝の意向を受け、起草
③	書記長官・次官の審査
④	清書担当の書記官が清書
⑤	二度目の長官・次官の審査
⑥	皇帝命令文の保存用底本に宰相が署名
⑦	皇帝による審査（赤い墨でかぎ印）
⑧	書記官が新たにう一本を書写
⑨	皇帝の印を捺し、書記長官が封印
⑩	書記次官が題署し、各官に下達

- ①皇帝の意向を書記官に伝達
↓
- ②～⑤書記官の作成作業
草稿作成・内容点検
清書・二度目の内容点検
↓
- ⑥宰相の点検
↓
- ⑦皇帝の認可
↓
- ⑧～⑩書記官の保存・発送作業